

を見上げている。そんな風景がどこかで韓国(朝鮮)につながっているように思う。彼が在日韓国(朝鮮)人であった訳でもなく、その風景にことさら韓国(朝鮮)的な風物が配されていた訳でもないが、ふたつの風景にどこか共通するなつかしさをを感じる。

私をはじめ韓国を訪れたのは 1973 年の冬、23 歳のことであった。いまでは記憶もぼんやりしているが、飛行機が遅延したためだろう、夜遅い時間にソウルに着いたので、市内まで行かずに空港近くの韓式旅館に泊まった。多少ことばは理解できたが、はじめての海外旅行の第一夜に、いきなり予約なしの旅館に入った。その不安と異国にいる興奮のなかで、オンドルの床の固さと暖かさを確かめたことを覚えている。翌朝、温度差でくもったガラス窓を開けると、外から凍てつくような冷気が流れ込んできた。頬に痛みを感じるほどの冷気を感じたのは、岩手で過ごした少年期以来のことだった。

まだ舗装されていない林道のような道を見ていると、白いパジ・チョゴリを着た老人が、ゆったりした足どりで歩いてくるのが目に入った。老人が向かう道の先には、なだらかな山なみが窓枠からはみ出しそうに迫っている。あれが私の韓国(朝鮮)風景の原画であろう。約 25 年経ったいま、そう思う。あの風景が、少年時代に焼きついた東北地方の風景につながっている。そう思われてならない。

ふたつの風景

友人とふたりで小動物の命を断ったことからくる重圧感が、時間とともに私のなかで拡大していき、後悔することが多くなった。それと併行するように、私は韓国(朝鮮)人に対する日本人の意識に関心を抱くようになったのだと思う。個人的な罪責感と、自分もその一員である日本社会のもつ韓国(朝鮮)人に対する差別観が簡単にむすびつくとは考えないが、私のなかでは、白い犬の殺害とそれに続く A との疎遠感が、これらふたつをむすびつける役割を果たしたように思う。

個人的な罪責感と社会的な差別観をむすびつけたもの。それは、疎外感ではなかったろうか。私のなかで、日本の東北の風景と韓国(朝鮮)の風景がつながったのは、疎外される側の被害者意識と、疎外(排斥)する側の加害者意識がかさなったからであろう。疎外というと、ふつつ疎外される側だけに注目しがちであるが、疎外する側の意識も大いに関係すると思う。私の場合、疎外感と罪責感がかさなったからこそ、ふたつの風景がむすびついた。いまは、そんなふうに考えている。

日本海(東海、トンヘ)の向こうにある漠とした方向にすぎなかったものが、時間の経過とともにぼんやりした風景になって私のなかにイメージとして定着し、少年期に刻まれた東北の心象風景につながったのであろう。韓(朝鮮)族の異名である白衣族が白い犬につながり、雪をかぶった東北の山なみにつながったとも考えられる。

風景をつなぐもの

私の心象のなかで日本の東北と韓国(朝鮮)の風景がつながっている。ふたつの風景をつな